# 中国、花と緑のエッセイ

多田 敏宏
《編訳》
Tada Toshihiro

ブックウェイ

**多彩な中国人作家11人**
**(歿後50年以上)が書き残した**
**「花と緑」に関する**
**エッセイの集輯、翻訳本。**

**時を超えて**
**日中双方の**
**共感を誘う**
**秀作18篇——**

# 中国、花と緑のエッセイ

多田 敏宏
《編訳》
Tada Toshihiro

ブックウェイ

## 編訳者前書き

この本は、様々な中国人作家が書いた「花と緑」に関するエッセイを集め、翻訳したものである。原作者は死後五十年以上経過している人ばかりだ。中国の法律では死後五十年間は著作権が保護されるので、こうせざるを得なかった。

最近、多くの中国人が来日し、「爆買い」や「日本体験」をしている。また、日本でも中国でも、環境問題や自然保護について活発な議論が行われている。

そのような中、双方の相互理解に役立てば幸いである。

二〇一八年三月十九日

多田　敏宏

# 目次


編訳者前書き　3
〈一〉老舎　7
〈二〉朱自清　21
〈三〉郁達夫　39
〈四〉許地山　45
〈五〉孫福熙　51
〈六〉徐蔚南　65
〈七〉盧隠　71
〈八〉林徽因　77
〈九〉陸小曼　83
〈十〉蕭紅　91
〈十一〉陸蠡　105

装幀　２ＤＡＹ

# 〈一〉老　舍（ろう　しゃ）

＊一八九九―一九六六、北京生まれ。
中国を代表する作家。
代表作「駱駝祥子」「四世同堂」など。

## 「五月の青島」

青島は季節の変化が遅いので、普通サクラは四月下旬に満開になる。桜が咲くと、青島の風や霧は草木の生長を止められなくなる。カイドウ、ライラック、モモ、ナシ、リンゴ、フジ、ツツジなど、みな先を争うように咲き、塀のすみや道端には柔らかな緑の若葉が出現する。五月の青島は、いたるところに花の香りが漂い、早朝になると花売りの声が聞こえる。公園の中は言うまでもない。小さなパンジーとニオイアラセイトウは緑の草地であでやかな十字形の花を咲かせたり、かたまって咲いたりしている。短い緑の生け垣の上には白い花が並んで咲いているが、まるで緑の枝に積もった春の雪のようだ。道の両端の家にも草花は欠かせない。塀が低いので、フジは花穂を塀に沿って外へ垂らし、街へ香りをたなびかせている。八重桜とライラックは塀の外からでも見られる。八重桜のあでやかさとライラックの清楚さは、見る人をさわやかな気持ちにするに十分だ。

山にも柔らかな緑が出現し、マツやヒノキはこれに比べると黒みを帯びて見える。谷にも緑が満ち溢れる。それだけではない。野生の花も咲き誇る。ハナズオウに似た少し青みがかった花を見つけたので、折り取って花瓶に挿しておいた。

青島の人が海を忘れられるはずがない。だが、不思議なことに、五月の海は特別に緑が美しく見える。だから人々は痛快な気分になるのだろうか？　道端の緑葉を見て、それから海を見ると、「春は海のように深い」という言葉が身にしみてわかる。緑、鮮やかな緑、浅い緑、深い緑、黄色がかった緑、灰色がかった緑、各種の緑がつながり、交錯し、変化し、揺れ動きながら、天の果てまで、山すそまで、漁船の外側まで、ずっと続いていく。風も冷たくはなく、波も高くはなく、船はゆっくりと進み、ツバメは低いところを飛ぶ。街の花の香りと海の潮の香りがまじりあって、空中を漂う。海は目の前にあるが、緑は無限だ。まさに、春は海のように深い！　喜びのあまり、歌い、海に飛び込みそうになる。だが沈黙し、心は天の果ての小島へと飛ぶ。目を閉じるとモモの花が見えるようだ。人面桃花相映じて紅なり。きっとこの小島でのことだろう。

この時節、霧が立ったり風が吹いたりすれば綿入れの服を着なければならない。が、ある日突然晴れ渡ると、合わせのジャケットで十分だ。もう冷え込むことはない、と人々は安心するのである。女性たちは最初にこれを知り、すばやく衣替えをし、ずっとそのままだ。海岸では、そよ風が少女たちの髪と服をたなびかせる。わざわざ映画館に行って美しいシーンを待つ必要などなくなるのである！　ここでは春の初めと夏の初めが響きあっている。風には春の寒さが残るが、草花や山、海は初夏のようだ。心は春だが、風景は夏。娘たちは一歩先にそれを出迎え、花と美しさを競い合う。女性の偉大さは、頽廃した詩人

にはわからないだろう。

人は草花とともに活力を取り戻してくるようだ。学生たちは特に忙しい。制服を換え、運動会をやり、嶗山や丹山に旅行に行き、労役に服す。当地の学生は忙しいが、外地の学生も見学に来る。数人、数十人、数百人が旗を掲げて、列を作って歩く。男も、女も、教師も、学生も汗だくだが、ちらちら海のほうを見る。学生を除いては、子供が一番快活だ。重苦しい冬服を脱ぎ捨てて、公園の中を走り回る。冬の間はサルはいないが、春になったのでピーナッツをサルにやったり、鹿を見たりする。花びらを拾い、芝生を転げまわる。そんな時お母さんが言う。「あと数日たったら大きくて真っ赤なサクランボが食べられるわよ！」と。

馬車はペンキを塗りなおす。馬はやせたままだが、車両はきちんと整える。ひと夏の商売の準備だろう。ペンキを塗りなおした馬車が街を走るようになると、夏に仕事をする喫茶店やバー、旅館や氷屋も、ペンキ屋を頼んで店をきれいにする。ペンキ屋は忙しくてたいへんだが、各地から来た踊り子たちが道をうろつくようになった。避暑にやってきた外国艦船の乗組員や大金持ちを血眼で探し、「仕事」の準備をしているのだ。海水浴場には人影とボートが目立つようになった。商売は草花より盛んなのだろう。そうなると、青島は青島人のものではないようになってしまう。金を持っている人が威張り、山や海を愛する人はいなくなる。

それならば、できるだけ五月の青島を味わおうではないか！

〈一九三七年六月十六日「宇宙風」第四十三期〉

## 「ハスの花を食べる」

今年、二鉢の白いハスを植えた。鉢は北平（北京の旧称）で見つけたもので、内も外も緑のコケでおおわれている。少なくとも五、六十年はたっているだろう。土は黄河のもの、水は趵突泉のものだ。ただ、レンコンは食べ残しを使ったので、少し格が落ちる。鉢も土も水も素晴らしいものを使っているのに、食べ残しのレンコンでは申し訳ない。どうか生長して花を咲かせてくれ。それでないと人に済まないではないか！　思いがけなく、茎をのばし、葉をつけ、花を咲かせてくれた。一つの鉢に七つか八つ、白い花だ。花びらの先端が赤みがかったものが二つあったが、ビャクダンの粉を塗ってすべて白い色にした。詩を作ろう。ほかに何ができるだろう。「すらりとして美しい」という言葉を私は七十五回も使っている。私がどれだけ詩を作ってきたか、考えてみてほしい！

それはそれとして。数日たったら、野菜売りが毎日いくつかの白いハスの花を売りに来た。最初はつらく思った。美しいハスの花をナスやトウガンと一緒に置いているのを見て。少し考えて、はっと思った。そうか、済南には名士が多く、自分ではハスを植えない。ハスを買って古い鉢や清水で栽培し、書斎に置いておくのだろう。そうだ、そうに違いない。

それはそれとして。友人と大明湖へ遊びにいく約束をした。友人が「ハスの花を買いにいく」と言ったので、「買いに行かなくてもいいじゃないか。僕の家にきれいなのが二鉢あるよ」と答えた。少し不愉快な気分になり、こころの中で「僕が植えたのは湖のものに及ばないとでもいうのか」とつぶやいた。そのうえ、とても暑かったので、湖まで行くのはくたびれる。家にいて、ゆでた枝豆をつまみに酒でも飲む方がいい。「自分で白いハスを植えた」ことをテーマにして詩を二つ作れば、とても優雅ではないか。友人は二鉢の花を見ながら、うなずいた。私の気分がよくなったのは言うまでもない。「友人も雅がわかるんだ！」と。この「るんだ」という言い方は新しいタイプの詩を作る時しか使ったことはない。が、この時は使わないわけにはいかなかった！　私はあわただしく家のものに枝豆をゆでるよう言いつけ、新鮮なクルミが買えるか確かめた。その後書斎に詩の原稿を探しにいった。友人は花の前にたたずみ、美しさを味わっているんだ！

それはそれとして。書斎から戻って、見ると、鉢の花は、しおれかけたもの以外、友人が全部もぎ取っていた。私は突然暑さに当たったみたいになった。天地が回り、声が出なかった。でも、友人はとても喜んでいた。「これだけあれば十分だ。湖へ買いにいく必要はない。入口の野菜売りのところにもあったけど、湖のものほど新鮮じゃない。君の物はあまり柔らかくはないが、使えるよ」と言いながら台所に入った。「田さん」と私の執事兼コックの名を呼び、「これをゴマ油で揚げてくれないか。外側の古い花びらはいらない。

内側の柔らかいものだけだ」と言った。田さんは私が北平から呼んできた人なので、私と同様済南の習慣はわからない。ゴマ油でハスの花びらを揚げるのは何かの漢方薬の処方だと思ったみたいで、「どんな病気を治すのですか？　やけどですか？」と尋ねた。友人は笑って言った。「やけどを治す？　食べるんだよ！　とてもおいしいよ！　野菜売りが売っているのを見なかったのかい？」

それはそれとして。いや、もう何もない。詩の原稿は燃やしてしまったので、ここには掲載できない。

〈一九三三年八月十六日「論語」第二十三期〉

## 「春が来て広州を思う」

私は花が好きだ。気候や水や土壌の関係で、北京で花を育てるのは、とてもむずかしい。冬は寒く、庭には花を置けないので、屋内に移すしかない。冬が来ると、私の家の中は花が人より多くなる。

しかたがない！　屋内で花を育てるのは、かごの中で鳥を育てるのと同じで、一生懸命に世話をしても、あまりうまくいかない。花室を建てるしか、問題を解決するすべはない。が、私の小さな庭には、そんなスペースはない。

屋内の半病人のような花を見て、すぐに美しい広州を思い出した。去年の春節の後、広州に一か月ほどいたではないか。ああ、本当に素晴らしいところだった！　人は情熱的で、花も情熱的だ！　街角や路地裏、庭の中や塀の上には、百花が咲き乱れ、客を歓迎している。まさに「友と交わり花を見るのは広州が一番」だ！

広州で私が滞在した家屋の門の向かいにポインセチアが生えていた。軒と同じくらいの高さで、目を奪うほど赤い花を咲かせていた。いつも小鳥が数羽、花の茂みにもぐり込み、ハチのように蜜を吸っていた。本当に美しい！　ひまさえあれば、私は段の前に座り、そ

れらの花と小鳥を見ていた。私の家にも、ポインセチアがあるが、三尺足らずで、鉢植えだ。秋になると休みを取り、冬の間は眠り続け、目を覚まさない。端午節の前後になると、小さいちっぽけな花を咲かせるが、小鳥を友とするほどのすぐれたものではない！　今、それは部屋の中で居眠りをしている。私と同様、故郷の広州をなつかしんでいるのだろうか！

春が来ても、花を育てるのは容易ではない。早めに庭に出すと、風や霜にやられる。出さないと、小さくて弱々しい茎や葉しか育たず、不健康だ。これでは花を咲かせることもできないので、イライラする！

やっとのことで春が来て、鉢を庭へ運んでも、うまくいかないことがある。庭が狭く、風を通さないので、多くの花が病気になるのだ。とくに、ハクモクレン、クチナシ、ジャスミン、キンカン、ツバキなどの南方から来た花は、そうだ。葉が落ち枝が枯れて、ひっそりと死んでいく。そこで、私は決めた。これらの名高い花を買うときは、長生きはしないものと思い定め、できるだけのことをする。幻想を抱かなければ、枯れたときに涙を流して心を傷つけることもない。同時に、キョウチクトウなどの丈夫な草花を多めに育てて、いつも眺めていればいい。

夏、北京の陽光は強すぎて、雨はなかなか降らず、たまに降れば防げないほどの大雨だ。これでは草花の生長に不利である。

秋はかなりいい。しかし、突然冷たい風が吹くが、これは防ぎようがない。かれんな花に大きなダメージを与える。そこで、一家全員で、屋内へと運び込む。部屋はみな植木鉢でいっぱいになり、人が出入りするときは、つまずかないよう注意しなければならない！　広州の友人たちが本当にうらやましい。庭の中も外も、四季花が咲き、それぞれすぐれたものばかりだ！　ハクモクレンは十メートルくらいの高さになり、幹は私の腰より太い！　英雄のような気概を持つキワタは、天へ向かって、赤くて大きな花を咲かせる。なんという勢いだ！　カイドウやアジサイのような普通の花でも、たくましく茂り、豊かに花を咲かせる。花は小さくても気迫は小さくない！　ほら、冬でも、窓の外にはボケの実が累々となっているではないか！　比べ物にならない！　花を思い出すと、友人たちのことも思い出す！　友人たちよ、詩を作ればいい！　詩想のあふれる環境にいるのだから！　春節が来た。友人たちよ、花が咲き、長生きすることを祈る！　新春おめでとう、仕事がうまくいくように！

〈一九六三年一月二十五日「羊城晩報」〉

## 「花栽培」

私は花が好きだ。だから花栽培も好きだ。だが、まだ花栽培の専門家にはなっていない。研究と実験の時間がないからだ。花栽培を生活の中の楽しみにしているに過ぎない。咲いた花が大きかろうが小さかろうが、良かろうが悪かろうが、気にしない。ただ咲いてくれれば、うれしい。私の中庭は、夏になると花や草でいっぱいになる。運動する場所がなくなるので、猫は家の中で遊ぶしかない。

花の数は多いが、珍しいものはない。珍しい草花は栽培が難しい。花が病気で死んでいくのを見るのは、つらい。北京の気候は、花栽培には、あまり向いていない。冬は寒く、春は風の吹く日が多い。夏は、ひでりでなければ大雨だ。秋が一番いいが、突然霜が降りる。こんな気候で、南方のいい花を育てるような腕前は、私にはまだない。それゆえ、育てやすい、自分の能力の範囲内の花だけを栽培している。

しかし、成り行きに任せ、ほうっておくだけでは、大部分の花は死んでしまう。毎日世話をし、良き友人のように親切にしなければならない。だんだんと、こつがわかってきた。曇りを好むものは、太陽の照るところにおいてはならない。乾燥を好むものに、水をやり

すぎてはならない。こつを覚え、花を育てる。これは面白い。ましてや、数年育ててきたものが花を咲かせれば、どれほど楽しいだろう！　でまかせではなく、これは知識だ！知識を重ねるのは、悪いことではない。

私は足が悪い。立つのも座るのも不便だ。私に世話をしてもらって、花たちは感謝しているのかどうか、知らない。だが、私は花たちに感謝している。仕事でいつも字を書いている。中庭に行って草花に水をやったり、植木鉢を運んだりしてから、部屋に戻って再び書き始める。しばらくたつとまた中庭に出る。これを繰り返せば、頭脳労働と肉体労働を共にやっていることになり、心身に有益で、薬を飲むより効果的だ。暴風雨が突然起きれば、一家総動員で草花を救助するが、とても緊張する。数百鉢の花を猛スピードで屋内に運び込むと、足腰も痛み、汗だくになる。次の日、天気が良くなると、また花を運び出す。再び足腰が痛み出し、汗だくになる。だが、これはとても意義のあることだ！　労働しなければ、花も育てられない。これが真実ではないというのか？

牛乳を配達する同志が門を入ると「いい香りだ！」とほめるが、一家全員誇らしく思う。ゲッカビジンが咲くころになると、友人を数人招いて、夜、花を共に楽しむ。ゲッカビジンはいつも夜に花を開くのだ。一株を数株に分けて、何人かの友人に贈呈する。友人が自分の労働の成果を持っていくのを見るのは、特別にうれしい。

当然、つらいこともある。今年の夏だった。三百株の菊の苗がまだ地上（植木鉢に移す

前だった）にあったとき、大雨が降って隣の家の塀が倒れ、三十種百株以上の菊の苗が押しつぶされてしまった。数日間、一家全員に笑顔はなかった。

喜びも憂いもあり、笑いも涙もあり、花も果実もあり、香りも色もある。労働は必要だが、それだけ知識も増える。それこそが花栽培の楽しみだ。

〈一九五六年十二月十二日「文芸報」〉